

邦夫さんは、留吉さん(82歳没)とハナさん(百歳没)の4人兄弟の末子として七重浜(現北斗市)に生まれました。少年期は、教員だった父の転勤で道南あちこちの町で過ごしました。函館の工業高校を卒業後、兄の勧めで開発局に勤務。当時は薄給でしたが、機械部門にいたためいろいろな資格を取らせてもらい、高校で得た基礎知識に資格と経験を積み上げながら転職を重ねました。最後の勤務先では主に官公庁まわりの営業を担当。「物を売ると違って営業は人の心をつかむのが大事」と邦夫さん。桂子さんは「仕事はよく変わったけど、暮らして困ったことはなかったの」と話します。1993(平成5)年、55歳の時に退職し、当時住んでいた旭川市神居から「もっと広い所で家庭菜園をしたい」と1995(同7)年に東川へ移住。現役時代はゴルフを楽しんでいましたが、退職後は夫婦でのスキーが趣味に。「海外旅行はスキーから始まった」と、壁にはスイス、イタリア、カナダでの写真が絵画のように飾られています。



桂子さんは、孝四郎さん(28歳没)と千代さん(91歳没)の1人娘として美唄に生まれました。実父は2歳の時に戦死してしまいました。後に養父となった人はとても優しく、妹が生

まれてからも桂子さんを心から可愛がってくれました。札幌で過ごした小学生時代の思い出は、豊平神社の宮司をしていた大叔父のところへお祓いのために連れてこられた馬を何度も目にしたことだとか。後に砂川へ引っ越し、高卒後は東京の美容学校で3年間勉強したのち帰郷、養父の美容室で働きました。ある時、旭川の護国神社祭にたまたま訪れていた邦夫さんに、桂子さんの両親が「よろしくお願ひします」と自然と口にされたそう。付き合ひ始めた後に邦夫さんは桂子さんの養父の親戚だったことが判明。桂子さんは「遠い親戚なら全くの他人じゃないので安心」と思ったのだとか。結婚は邦夫さん28歳、桂子さん24歳の時。その後は、美容師の仕事は知人から依頼されたら手伝うくらいで、主婦業に専念。息子さん2人、孫2人にも恵まれました。現在は俳句や太極拳、ヨガなど、静と動を併せ持つ多趣味の持ち主です。

気骨ある邦夫さんと年齢を感じさせないしなやかな桂子さんの話の途中、桂子さんが席を立った時に「出会った時の桂子さん、素敵だったでしょう」と声をかけると、邦夫さんは照れながらもそつとウインク。時折、忠別の川面を渡る涼風が居間を通り抜ける紺野家は、まさに「風通しが良い」。

俳句

過ぎし日はせつな八月の雨に泣く

鼻唄で今年を彩る遠花火

炎天を行く子ギツネの背骨みえ

少年の全集中は虫の声

夏盛り坊やいつしか少年に

郷土館残暑を乗せて電車あり

青鷺の田毎に一羽据え置かる

新じゃがのカレーに引き出す旨さかな

夏山の天井落下星の夜

太陽の下蝶々も舞姫となる

片陰を一途にひろうハーネス犬

秋近し今宵は蛸のやわらか煮

日焼けした夫の傑作なすの艶

蜜豆の心の隙に滑り込む

工場の見まごう夏夜は銀の色

本田 咲

こばやし 星来

斎藤 夕桜

山内 みゆ

小林 ろば

八田 昌代

石澤 清宏

杉山 ひろのり

横田 則子

杉山 りつ

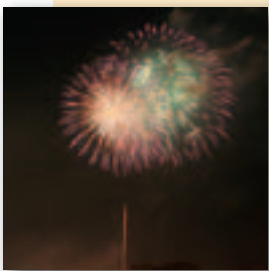
高瀬 潤

三島 智

保科 なほ

若田 郁

佐々木 りえ



東川町ヌタップ吟社
石澤 ☎ 82-5146